

令和3年5月6日

## 京口門だより No.91

今年のゴールデンウィークはうち続く新型コロナウイルス感染症のため、自粛生活を守るようにいわれ、不自由な生活となっていますが、なかには我慢しきれない若い人たちもいるようです。しかし不自由ななかでも何かを考え、工夫をして辛抱する生活も大切なことではないでしょうか。いまは耐えることに甘んじる時期ではないかと思えます。新緑の林や森を散策するのもよい季節です。「行く方や新緑充つる山の町」(鈴木露翠)

この新型コロナウイルスの時節に、「コロナうつ」とか「家庭内暴力」という現象がみられると言われています。「コロナうつ」とはいわゆる「気うつ(鬱)」ですし、「家庭内暴力」は耐えられなくなって心がイラつき、つい暴力をふるうことと言えるでしょう。この二つは実は心の表裏であって、一方は気が沈み、一方は気がいら立つことと言えるのではないのでしょうか。

いきなりですが、江戸時代中頃に京都に和田東郭という漢方の医者がありました。宮中にも参上し、皇后さまの出産を無事に済ますように助力して、天皇さまの覚えがよく、のちに法眼という称号も与えられた名医でした。東郭先生は精神神経的な病気にもすぐれた診断と治療を行った医者でした。心の病の人た

ちを多く治療した症例も記録されています。彼によれば肝疾(漢方でいう精神神経の病)という病は、ちょうど木の成長に似ていて、真っすぐのびのびと育つのが心の状態が良いことであり、途中で何かの力で屈曲した場合に心のひずみが生れ、それには心をいら立たせる場合と、気がめいって鬱々とする場合がある。イラつきには抑肝散という薬が良く、気うつには逍遙散という薬が良いとのべています。よく胆(キモ)の据わった人とか、胆の太い人という表現があるように、生まれながらの胆の大きさが精神神経的な病になり易いか、なりにくいかに関わるとしてしています。古い江戸時代にこのような考えをもって診療をしていたのは驚きです。

このコロナの時代も困難なことに心を動かされて、気うつになったり、イラついて他人に当るなどというのは、こころの容量が狭いといえるのではないのでしょうか。もっと気持ちを広く大きく持って、困難に耐え、自分の気持ち減入らせたり、イラつかせたりしないように努めたいものです。

